

科学と社会委員会（第23期・第2回）議事要旨

- 1 日 時 平成27年5月15日（金） 13:00～14:45
- 2 場 所 日本学術会議5階 5-C(1)会議室
- 3 出席者 井野瀬 久美恵（副会長）小松 利光（第三部会員）戸山 芳昭（第二部会員）
遠藤 薫（第一部会員）川合 眞紀（第三部会員）

（欠席）小玉 重夫（第一部会員）杉田 敦（第一部会員）石川 冬木（第二部会員）
城石 俊彦（第二部会員）渡辺 美代子（第三部会員）

（事務局）井上参事官、渡邊参事官補佐、松宮参事官補佐、鳥生審議専門職、辻専門調査員、原審議調査専門職

4 議事要旨

- (1) 第1回議事要旨（案）の確認
- (2) 科学と社会委員会運営要綱の一部改正（「政府、社会及び国民等との連携強化分科会の廃止について）について、井野瀬委員長から提案され、同分科会が第22期はほとんど開催されず、機能がすでに別のところに分科され、それぞれの分野で活動している等の理由で廃止にしたい旨の説明があり、全員一致で了承された。
- (3) 分科会の審議状況について

井野瀬委員長から、科学と社会委員会は、先ほど（資料3-1参照）「政府、社会及び国民等との連携強化分科会」の廃止が決まったので、その他の5つの分科会について、審議状況について共用しながら、問題はないか、課題はないかを議論していきたいとの発言があり、順番に各分科会の審議状況の説明があった。

- ① 広報・科学力増進分科会の審議状況については、井野瀬委員長から説明があった。
第23期から「広報・科学力増進分科会」は、科学者委員会に統合されており、科学と社会委員会の委員は、メンバーになっていないが、資料3-2に第1回目と第2回目の議事要旨があり、また、広報・科学力増進分科会の小松委員長からお聞きしている話では、どういう風に日本学術会議からの発信力を強化していくとか、提言等のプレス等への発表の仕方、そこに関わってくる話、あるいは、BSPとの協力でやっているサイエンスカフェやサイエンスアボラについては、今年度も共催の方向で動いていることが報告されているとのこと。

広報力については、このあとの課題別の分科会とからめながら、日本学術会議自身の発信力と強化をどう結びつけるか、広報にこちらから提言を出していくというよ

うな話になるとの説明があった。

- ② 年次報告等検討分科会の審議状況については、井野瀬委員長から説明があった。総会でも報告したが、年次報告書を作るということで、半期の活動の報告書、その中には3月に行われた第22期の3年目の活動を総括する外部評価委員会の報告等も含めて総会では報告した。もっぱら、外部評価に当たる部分を担当しているが、次の総会でも臨時報告ということで活動を報告することになっているとの説明があった。

- ③ 「知の航海」分科会の審議状況については、遠藤委員から説明があった。

第23期では、すでに2回開催し、岩波書店と共同で岩波ジュニア新書として日本学術会議から発信を行うということで、すでにいくつかの文書が出ているが、今後とも努力していきたい。10月の総会で発表できるものとしては、理系の先生から見た「日本列島人の歴史」が仕上がっているが、日本学術会議から出すということで、査読者の人選が難航していて(文科系の方に査読をお願いしたい)、少し遅れている。ほかには、「古事記をやさしく」を書いてもらっているが、それはもうすぐできる予定。それ以外に遠藤委員が2冊担当で書く予定になっていて、ゴーサインが出たらなるべく早く出したいとの説明があった。

井野瀬委員長から、10月の時に会員に報告できるものがあれば、お知らせしたい。また、岩波書店との兼ね合いもあるのでその辺はよろしくお願ひしたいとの発言があった。

- ④ 課題別審議検討分科会については、井野瀬委員長から説明があった。第23期は、(資料5参照)この間、提言として出された「高レベルの放射性廃棄物の処分に関するフォローアップ検討委員会」が少し設置期間を続けてシンポジウム等々をやるものと「オープンサイエンスの取組に関する検討委員会」の2本が今年になって立ち上がっている。

後ほど、課題別審議検討分科会に係る課題別委員会の立ち上げについてお知恵を伺いたいと思っている。資料4の1に、これまでの第22期の課題別の委員会の検討テーマがあげられている。第21期からの継続等も含めてかなりたくさんの課題別のテーマが上がっている。日本学術会議の本領である、いろんな分野の専門家が集まっていて、そこでチームを組めば、専門家では解けない、現代が抱える、あるいは未来を見透した問題も、知恵を寄せ集めて、横釘さして分野、横断的に、まさに日本学術会議が求められている素行になっているのが課題別委員会で、今までうまく機能していたのが、今年に入ってまだ2つしか立ち上がっていないのが悩ましい問題で、どうやって課題別を立ち上げるか、後ほど多くの議論をしたいとの発言があった。

- ⑤ 課題別審議等査読分科会について、井野瀬委員長から説明があった。各委員に分担して査読していただいているが、第23期については、「科学研究におけ

る健全性の向上について」の回答と、2月に「第5期科学技術基本計画のあり方に関する提言」と「高レベル放射性廃棄物の処分に関する政策提言—国民的合意形成に向けた暫定保管」を査読していただいたとの説明があった。

井野瀬委員長から、現在、情報共有としてこのような活動がなされているということで、10月の総会には、科学と社会委員会として、以上の5つの分科会の審議状況を報告することになるとの発言があった。

(4) 課題別委員会について

井野瀬委員長から、課題別委員会では、現在2つの委員会が審議されているが、非常に上がりづらい状態で、いかに分野、横断的な課題を出していくか、何かいい知恵がないかとの提案があり、各委員との議論がなされた。意見としては以下のとおり。

- ① 幹事会附置委員会は現在10個ほどの課題が出されているが、トップダウン方式で行われている。課題別委員会は、下から問題提起をしていくボトムアップ方式が基本であるが、ボトムアップをどのように吸い上げるかが問題である。前期は、公募方式が行われたが、一部未完のものが見られ、立ち消えになってしまった例が2つくらいあった。例えば第一部ではジェンダー関係の分科会がいくつかあるが、それをまとめて他の部にもひろげて、一つの課題別委員会を立ち上げるように検討している。また、地区会議をうまく利用して、積み上げていく方法もあるとの発言があった。
- ② 第一部では、過去に報告された提言を見直して、方向性を見直して、すいているテーマを洗っているところ。
- ③ 今ある分科会を通していく形はある。合同委員会を年に何回か開催することも必要。
- ④ 各省庁から依頼があったものに回答していくことも大事だが、どの程度、役に立っているかわからない。二年間ぐらいで回答できる課題をいくつか提案して、選んでもらう方法もある。幹事会のほうから重要であるテーマをだして、使命感を持ってやるのが大事で、少し上のメンバーでテーマを決めてもらう必要がある。
- ⑤ 日本学術会議のインパクトがどうだったのか、記事の中でどう取り上げられているか。メンバー全体が感じていない。発信力をどう図るのかも必要である。
- ⑥ 記者発表用の用紙については、(別添資料)会長も国際的な発信についても言っているので、様式の上半分は日本語、キーワードは5つくらい、下半分に英文を書き込む。連絡先等の記入等、短いものでいいから、記者の方にわかりやすく、知りたいものの入り口としてのアピール性の問題が大事と思う。メディアの対応かが重要である。
- ⑦ 提言を発表するときに、関係者に確実に届いているか。意見書が出ていくルールを確保する必要がある。問題として、総括的なテーマとして、大きくまとめるこ

と、ターニングテーマを検索してもらおう。何が問題なのか、提言としてどのように出していくのか。継続していくこと、問題が出たときにドーンと出していくことが必要と思う。

議論の結果、その時々の問題点を絞り込んで、課題とすること、過去の提言等を踏まえて、課題となる問題についても、各部でも検討していくつか案を検討して、6月か7月の幹事会に提案することとすることが了承された。

また、今、考えられるのは、①今後急激に進む人口減少社会と②分野横断的、総合俯瞰的に課題解決を思考（コーディネート、インテグレート）できる人材育成」統合にみる人材育成があるが、各部における検討も必要。関係資料を作成して、検討することが提案された。

- (5) インパクトレポートの作成について、意見が交わされ、様式を簡素化し、英文も入れ、ホームページ上で工夫するなどの積極局的な情報発信が必要であるとの意見がまとめられた。

以 上